

G-1 「食物」分野における児童の家庭生活の実態に関する研究(第4報)

—京都市内の附属小学校について—

京都女子大 ○岡野 純

京都教育大 清水 歌

目的 本研究では、家庭科を学習している児童(6年生)が、日常の家庭生活において、小学校で学習する家庭科の内容及びそれに関連することから、どの程度に経験しているか(全体・男女別)を知り、既報の4年生の児童の実態とも比較することにより、今後の家庭科教育のあり方を研究するために、役立てることを目的とした。

方法 調査対象は京都市内にある大学附属小学校(6校)の6年生の児童を選び、人数は男子(264名)、女子(285名)、男女総数549名である。調査の時期は、昭和48年9月17日～10月17日。方法は質問紙法及び若干の聞き込み調査法を併用した。調査項目は「食物」分野の「調理」に関するものの中から、児童の経験の有無・動機、調理作業(洗浄・切断・皮むき作業など)をとりあげた。

結果 6年生の児童は家庭において経験しているものが多く、女子は男子よりも多い。6年生の児童のほうが4年生の児童より経験が多い。